

中山恵子作 「冒 険」

恵子ナレーション めぐみこ 夏休みも半分ほど過ぎたころ、わたしたちは、兄弟全員で海へキャンプに行くことにしました。
ここ数年、全員で遊びに行くことなどなかったの、みんな大乗り気でした。

効果音 (波の音)

吉彦 ヤッホー、海だあ！

誠 やっと着いたぞ〜！ 海は広いな、大きいな〜。

恵子 涼しい潮風。ねえ、すぐ泳ぎに行こうよ。

浩一郎 ダメだよ。まず荷物を整理してからだ。食事当番はメシの支度してくれよな。

保 吉彦、お前、食事の係だろ。怠けるなよ。メグ、荷物片付けたら泳ぎに行こう。

吉彦 チェ！ つまんねえの。

誠 いいよいいよ、早いとこ準備しちやおうぜ。

ナレーション 二人は渋々、遊びに行くわたしたちを横目で見ながら、夕食の準備にかかりました。1日目のメニューは？というと、カレーライスのように。実は、彼らはカレーしか作れないのです。

吉彦 おーい、メシだぞ〜、おーい！

誠 走ってこいよ〜！

保 あー腹減った。

恵子 いいにおい。早く食べよう。

隆 よーし、みんな席に着いて。それじゃ、“日々の糧”を歌って食事にしよう。

全員 (“日々の糧”)

隆 じゃお祈りするよ。

吉彦 (小声で)あーあ、こんなに腹減ってるのに、またお祈りか。頭にきちゃうぜ。

保 仕方ないよ、兄貴がクリスチャンなんだから。2〜3分だ。我慢しろ。

隆(バックで祈る) 天のお父様、楽しみにしていたキャンプを迎えることができ感謝します。最後まで事故がなく、楽しいキャンプができるよう、僕たち11人をお守りください。この夕食を備えてくださったことを感謝します。イエス様のお名前によってお祈りいたします。アーメン(全員「アーメン」)

ナレーション わたしの兄弟は全部で11人。一番上の兄、隆はクリスチャンで、両親に代わって全員の面倒を見ています。そのため、わたしたちはクリスチャンであってもなくても、一日は祈りに始まり祈りに終わる生活になっていました。

全員 頂きまーす。

浩一郎 (ふざけて)明日の晩は、新鮮な魚でも食べたいですなあ、コック長。

誠 そうだよな。せっかく海に来たんだから…。おいコック長、明日は魚にしようぜ、な？

吉彦 よし、それじゃ朝から釣りに行こうぜ。

隆 魚とは結構だが、ちゃんと釣ってきてくれよ。

ほかの4人 (口々に)「オーケー！」「信用してくれよな、兄さん」「大丈夫、任しとけよ」「30匹ぐらい釣ってくるよ」

ナレーション そんなわけで、話はまとまり、次の日、わたしたちは釣りに行くことになりました。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 朝、まだ眠い目をこすりながら、外に出ていくと、もうとつくに起きていた“魚釣り班”が、ずいぶん大きないかだを見つけてきて、壊れているところを修理していました。

恵子 まさか、こんないかだで釣るんじゃないでしょうね？

吉彦 何言ってんの、お前は。これで行くに決まってんじゃない。

恵子 えー！ ウソでしょ！

誠 ウソなんか言うわけないだろ。朝メシ食べたら集合な。兄貴には言うなよ。

浩一郎 おれ、まだ死にたくないよ。

吉彦 文句言うなよ。お前が船長でいいからさ。

誠 じゃ、朝メシにいこうぜ。

効果音 (波の音)

ナレーション わたしたちは、オンボロいかだで釣りに出かけました。岸から100メートルくらいのところで釣り糸を垂らしていたのですが、出かける前の不安とは打って変わり、みんな“にわか漂流者”の気分を満喫していました。

恵子 なんか、すごくいい気分。浩一郎兄さんはどう？

浩一郎 “船長”と呼べよ。ところでコック長、少しは釣れたかい？

吉彦 ぜーんぜん。少し場所を変えようぜ。

誠 ン、そうだな。もう少し沖に出てみるか？

浩一郎 よし、帆を上げろ！ 全員、配置に就いて、オールを握れ！ ようそろ、^{おもかし}面舵いっぱい！

ナレーション 船はゆっくりと沖へ走り出しました。すると、ようやく何匹か、魚が釣れてきました。ところが…。

音楽 (ブリッジ。不安げ。)

誠 おい、大変だ。このいかだ、どんどん沖へ流されてるぞ。

吉彦 あ、本当だ。ヤバいぞ！

誠 船長！ どうするんだよ？

浩一郎 なんだよー、おれに言ったって分かるわけないだろ！ とにかく岸に向かってこいでみよう。

恵子 あーん、どうするの？ あ～あ、こんな海の真ん中で。

吉彦 ダメだ。潮に乗ってる。

誠 仕方ない、泳いで戻ろうか？

恵子 いくら自信があったって、泳ぎ切れるわけないでしょ。

浩一郎 だからおれは反対したんだよ、こんないかだ。

吉彦 今更そんなこと言ったって仕方ないだろ。

ナレーション 最初、言い争っていたわたしたちも、しばらくすると黙ってしまいました。漂流者の気分を味わっているどころではありません。実際に漂流者になってしまったのですから。わたしたちは、海の真ん中で、どうすることもできずに流されてゆきました。

誠 お前、何ぶつぶつ言ってるの？

恵子 …お祈りしてるのよ、神様に。

吉彦 バカ、こんなときにお祈りしたって仕方ないだろ。

恵子 だって、もう祈ることしかできないでしょう？ 海の真ん中で助けも期待できないし。わたしにできることって、“祈り”しかないわ。

誠 祈って助けが来るんだったら、おれ、なんだってするけどなあ。そんなことあり得ないし。

浩一郎 神様がいるのなら、すぐ助けてくれるはずなのにな。こんなに困っているんだぜ。生きるか死ぬかの瀬戸際なんだよ。

恵子 でも、どうしようもないのよ。ね、みんなで神様に祈ろう。

吉彦 ナンセンス！ それより、この潮から抜け出そうぜ。

恵子 それじゃ、祈ってからやろうよ。ね？

誠 吉彦、いいから祈ってみようぜ。信じていなくたって、こんなときだからやってみよう。な？

浩一郎 よし、ダメでもともとだ。みんなで祈ってみようよ。

恵子 神様はきっと助けてくださるわ。だって、神様は決して裏切らないのよ。

吉彦、 イヤだ！ おれはそんなものには頼りたくない。頼れるのは自分だけなんだ。とにかく、やれるだけやってみよう。

ナレーション それからわたしたちは、それぞれ祈り始めました。最初はかたくなに拒んでいた吉彦も、万策尽きて座り込むと、いつしか真剣に祈っていました。

吉彦 (祈り。一言一言、言葉をかみ締めながら) 神、神様、今、僕たちはいかだで流されています。このままでは死んでしまいます。僕は…、僕は今まで神の存在など信じなかった。でも、もし、もし本当に神が…、あなたがいるなら、僕たちを助けてください。確かにあなたは生きておられることを、教えてください！

ナレーション いかだは、その間もどんどん流されてゆきました。太陽も沈み始め、祈りながらも、心の中の不安は次第に募っていきました。「主よ、面白がっていかだに乗ったわたしを救ってください。」何度も何度もそう繰り返しました。

吉彦 おい、向こうから船が来る。おーい、ここだ～！

浩一郎 あ、船だ。おーい！

恵子 どこ？ ねえ、どこ？ あ、ほんと、船、船よ！

一同 (口々に)「おーい、おーい！」「ここだよ～！」

ナレーション わたしたちは、精いっぱい声を上げて助けを求めました。その船は、陸にいた兄たちが捜索を頼んだ海上保安庁の船でした。まっしぐらにいかだに向かって進んでくる船は、主がわたしたちに差し伸べてくださった“救いのみ手”でした。主は決して、わたしたちをお見捨てにはならなかったのです。わたしの心は感謝の気持ちでいっぱいでした。

恵子 (泣きじゃくりながら) 神様、イエス様、ありがとう。本当にありがとう！

吉彦 (感動して) やっぱり、神様はいたんだ…。

<完>